

町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会
第4回議事（概要版）

平成23年1月21日18:00～20:00
町田市役所森野分庁舎2階第3会議室

配布資料

- 資料1 報告書骨子（案）
- 資料2-1 文化施設における資料の概要について（博物館所管分）
- 資料2-2 文化施設における資料の概要について（国際版画美術館所管分）
- 資料2-3 文化施設における資料の概要について（自由民権資料館所管分）
- 資料2-4 文化施設における資料の概要について（生涯学習課文化財係所管分）
- 資料3 町田市の博物館等の新たな在り方のイメージ

1 前回議事内容の確認

前回の内容の確認。配布された議事録について修正事項がある場合は1月27日までに事務局まで連絡。

2 議事

議題1. 報告書の骨子案について

「町田市の博物館等の新たな在り方構想検討委員会検討結果報告書」の章立てとして、事務局より1. 博物館の存在意義、2. 博物館等の現状と課題、3. 博物館等の新たな在り方の整理、4. 博物館等に求められる役割、機能という骨子案の提出があった。

鈴木良明委員長： いよいよ、この委員会のいろいろなご意見、議論を踏まえて、まとめに入りたいということです。今ご説明ありました骨子案ですけれども、ご意見いただければと思います。

渡辺一雄委員： この報告書を誰に出すのかということをしっかり押さえていなきゃいかんと思います。市民に対して報告するというポジションを取るかどうかを、明確にしておいた方がいい。今回、博物館等のあり方の検討を開始した理由として、老朽化した施設を何とかしなきゃいけないという差し迫った問題があるわけです。そういったところも含めて、なぜ今この議論をやるのかという、市民にとって分かりやすいイントロダクションをきちんと書いた上で存在意義というのを書いていく。アンケート結果とか市民の意識調査等でも裏付けられているところから再度確認する書き出しが必要かなと思います。

鈴木良明委員長： この委員会は、市長さんからわれわれに対して検討して欲しいという話をいただきました。その報告は、やはり市長さんに返すということになるんでしょうね。

渡辺一雄委員： 市長の市民感覚というところを見据えて、きちんと市民に向かって物を言っているというポジションが必要じゃないかなと思います。

山口有次委員： 今の博物館に貴重な資料がたくさんあるということは、この項目の中の現状と課題に書かれるようなものなののでしょうか。大事な良いものがたくさんあることを強調しないと、博物館を作り直そうというところまでたどり着かないと思います。こんなに重要なものがたくさんあって、しかも倉庫などの収容状況や展示の仕方も悪いという現状を加えるべきでしょう。

濱田隆委員： 町田市における博物館等の現状と課題という中では、そういう項目がありませんね。

鈴木良明委員長： マイナス面だけでなく、町田市は貴重な資料が豊かであるというプラス面も強調するよう、再整理をしていただければと思います。

濱田隆委員： 資料の重要性にも関わらず、現状は非常に老朽化しているとか、劣悪であるということ強く表現するという。

渡辺一雄委員： あるいは、かつて町田は全国から評価されたとかですね。これは現状というより、成果と課題として書くぐらいでもいいのかもしれない。

濱田隆委員： 現状の市立博物館をターゲットにして問題を洗い出そうという感じが強く出ていますが、あまりあるところに偏らないような形がいいと思います。

鈴木良明委員長： それぞれの施設が歴史を持って本日まで至っているわけですから、それを継承していくという視点が必要じゃないかな。

事務局： この委員会を出していく目玉とか、特色とか、町田の何かそういうものはあった方がいいよねというご意見を聞いたような気がするのですけれども。そういうエッセンスを入れたものにできるだけしていきたいと思います。

議題 2. 資源の有効活用について

各施設が良いものを持っていることを確認するために、市立博物館、国際版画美術館、自由民権資料館、生涯学習課の文化財係が保管している収蔵資料の現状と今後の見通し、課題を示す資料が提出された。

事務局：

市立博物館については、資料数はおよそ1万1000点弱。そのうちの約半分が美術工芸品。半分が町田市の郷土資料といえるものです。人気が高いものは、ガラスです。それから、陶磁器、大津絵、風俗戯画というあたりが一番借用の依頼の多い部分です。

基本的に他の館ではなかなか持っていないものというのが、40年間にわたる活動の中での収集方針です。ガラスは日本で3本の指に入るとか、陶磁器、東南アジア陶磁では日本最大、大津絵も日本で2番目というような形になっています。課題は、狭隘化と保存環境の劣悪が最大のものであります。

国際版画美術館について、資料は版画を中心に約2万1700点で、日本の版画が70%、海外30%、近現代が80%、それ以前の版画が20%というような構成です。町田ゆかりの版画家の故畦地梅太郎先生の作品を筆頭に1500点ほどあるということで、評価額は約30億円という日本で随一のコレクションです。2004年度以降、少ない年で100点ほど、多い年で300点以上の貸し出しの実績があり、かなり外の館からの引き合いがあるということが分かります。今後の課題としては、収蔵品の増加に伴い、収蔵設備が少なくなりつつあります。

自由民権資料館は、古文書が16万点というものすごい数があります。分類としては、研究文書等の古文書、近世近代刊行物、公文書、それから刷物がちょっとあります。今後の見通しとして、現体制では積極的に資料収集のために旧家に当たることは不可能ということで、現在収集している資料の整理に重点を置き、借用から寄託、寄贈への切り替えを進めます。活用状況としては、毎年文学館に何十点かの貸し出しをしている状況です。課題としては、まず通史展示を始めとする市域の歴史を展示・紹介する場がないこと。2番目に十分なレファレンスを行うために、中世、近世、近代に各1名の正規職員が必要であること。3番が寄贈、寄託を前提にした借用資料などを整理するための人員と時間が確保できていないこと。4番目に中世、近世、現代にも良い資料が多く残されているが、それを紹介していく環境をほとんど作ることができない、ということです。

最後に文化財系の所蔵品ですが、資料の数はコンテナに換算して1万1511箱という壮大なものです。内訳として特に縄文時代については、縄文時代草創期、早期、前期、後期、晩期とあらゆる時代の遺物があり、町田が縄文の宝庫であることを示す非常に特色のある収蔵品だと言えます。借用依頼は、年に10件～20件くらいの出展数があります。課題として、全国屈指の縄文時代の資料を保有しながら、常設展示の施設がありません。

小瀬康行委員：

この資料から見ますと、町田の博物館というのはどれも非常に個性が強いのが特徴だと思います。個性が強い分、他が手薄になるということは、ある意味で止むを得ないような気がします。全部平均して施設の性格を作っていくよりも、むしろ個性的な博物館、資料館をどれだけ伸ばすかというふうに考えた方が良いのではないのでしょうか。博

物館等のさまざまな機能を全部同じように整備するというのではなく、個性のある博物館に向けた機能を強調していくことを、この委員会としては考えてもいいんじゃないかなと思います。

鈴木良明委員長： その辺も、報告書の中で触れておかなければならないことでしょうね。町田は非常に個性的な博物館や施設が多い。これは大事なことだろうと思います。個性的だから、ターゲットがはっきりしていることも、町田の特色でしょう。
それでは、今の資料は報告書でデータとして使っていただくということで、引き続きお願いします。

議題 3. 博物館機能の将来像について

資料として、前回の委員会で 3 つの分野（美術系、自然系、歴史民俗系）に分けて整理したイメージ図と、分野ごとの意見の要約版が提出された。

濱田隆委員： 要約版に、美術系の 3 つの施設を「一体化する必要はないが」と書いてありますが、一体化も視野に入れて考えてもいいんじゃないでしょうか。それぞれの個性や特色は当然生かさなければなりません、機能的には一体化といったやり方があると思います。
スペースとして、芹ヶ谷公園の中に一体化した施設はできないことはない。資金の問題です。

渡辺一雄委員： 資金の話になると、町田市の文化芸術振興指針くらいのところに持ち上げておかないと無理でしょうね。

前島正光委員： 一体化という意味は、ハードとソフトの両面がありますよね。博物館に対する議論をもう少し深めていったら、どのように機能を一体化させたらいいか、エリアも含めて具体的なものが見えてくると思います。理想的な博物館のあり方を、掘り下げるべきではないでしょうか。

山口有次委員： 機能的には近づけた方が分かりやすいでしょう。できるだけ近づけておくという表現に留めておけば、どちらにも取れます。

濱田隆委員： 一体化というのは、特にハード面だと思います。いわゆる公共の展示ギャラリーなどのことです。版画美術館にたまたまギャラリーができたものだから、版画美術館のギャラリーだと思いがちだけれど、そうじゃないんですよ。ギャラリーは美術館コンプレックスの中の共用の場所であるというような具合に、踏み込まなければいけないと思います。

渡辺一雄委員： 一体化した場合のメリットとデメリットを整理しておく説明しやすいでしょうね。極端な場合、もう市立博物館のビッグバンを起こしちゃうということだってあり得る。利活用、集客数の増加、使い勝手が良いということになれば、一層ビッグバンを起こす必要があります。

- 前島正光委員：** 今の資料の美術系の課題のところ、「近づけた方が利用者にも分かりやすい」という表現がありますが、もう少し総括的に物を見て表現した方がよろしいかと思えます。分かりやすいというのは非常に末節な話で、もっと大事なことが効果としてあるものですから。
- 濱田隆委員：** 歴史民俗系については、どこかにセンター的機能が必要であるということは、自明のことだと思うのですが。町田市の歴史民俗系の中核的な存在として、やはり自由民権資料館が核になるべきではないでしょうか。そうなれば、それにふさわしい人材確保というのが必須の条件になってきます。
- 小瀬康行委員：** 専門的であればあるほど、それを扱う人間は専門的でなければならないということは、明らかだと思うのです。専門的なことは、やはりもっとも専門的であるべきです。
また、施設/ハードの面で言うと、やはり古文書とそれ以外のものでは、やはり保存・管理の仕方が全く違うんですね。ですから、自由民権資料館の古文書は、独立した施設の方がふさわしいのではないかなというのが私の考えです。
- 山口有次委員：** センター機能については、エマージェンシーのランプが付いているくらい急務であるという印象を受けます。すぐにでも対応すべき大きな問題です。センター機能、情報センター機能等の必要性について、報告書の文言として強調すべきだと思います。
- 渡辺一雄委員：** 保存管理は専門的な技術が必要ですが、活用という側面については、学校や教育委員会にも入ってもらわないといけないということを、申し上げた方がいいんですけどね。教育委員会としてどうするのかという原案を、きちんと書いてもらった方がいいんじゃないでしょうか。
- 濱田隆委員：** 横浜市の歴史博物館のように、大きな建物の中で歴史民俗、考古を一体で処理して、その土地の歴史の流れを一貫して見せるのが理想的です。全ての資料を保管はできないにしても、そこで歴史、民俗、考古を一体的に展示するということです。もう一つの考え方は、それぞれ収蔵だけして、収蔵施設を整備して、そのエキスをどこかで展示する。一括保存・一括展示と、分割保存・集中展示というのでしょうか、やり方は大きく分けて2つあると思います。
- 渡辺一雄委員：** 自然史系については、里山景観保存、あるいは里山保存が学生たちに教えている中でも非常に分かりやすいテーマです。報告書の中には、その観点をできるだけ入れていただければと重ねて提案をしておきます。
- 小瀬康行委員：** 資料には、美術系、歴史民俗系、自然史系の3つの系列をまとめた形で駅前サテライトを置くという考え方が出されています。サテライ

トそのものが1つのミュージアムと言うか、施設に当たりますから、3分野を総括したような施設とは受け取られないだろうと思うんですね。

濱田隆委員： 何か1点集中的な発信拠点とか。これはサテライトじゃないでしょう？

前島正光委員： どちらかと言うと、市民あるいは町田に来られる方に対して理解をしてもらおう。あるいはそこで一括していろんな情報が得られるという、そんなイメージだったわけです。

小瀬康行委員： そうすると、このサテライトというのは、ミュージアムナビゲーションですね。

濱田隆委員： ナビゲーションであり、同時にそこに展示してもいいんじゃないかという。

山口有次委員： 駅前の再開発現場で、少し広めの空間が確保できればいいのですが。駅前の拠点に博物館や美術館が出ていくだけでなく、生涯学習や福祉と関わりなど、町づくりに複合的に貢献する場所として考えて行った方がいいんじゃないかと思います。その意味では、組織横断的にそこを使っていくことが望ましい。博物館とか、生涯学習とか、場合によっては商業とか、観光の案内所も作れるし、福祉にも役立てられます。ミュージアムショップやレストランも、可能なら入れたらいい。

議題 4. 人材の配置と育成について

事務局より、施設ごとの現在の学芸員の配置状況が資料として提出された。

鈴木良明委員長： 少し施設の姿が出てこないと、報告書にはちょっと書きにくいところですね。

渡辺一雄委員： 定員管理が非常に厳しい中で、学芸員の採用というのは非常にきついんじゃないでしょうか。また、こういった文化施設というのは、館長の力量というのが非常に大きいでしょう。基本的に学芸員の状況を見て行く場合には、館の機能を全うできるだけのチームワークや、館長の見識などの関連で分析しないと、一概に何人いるのがいいとか判断しにくいですね。それと、町田市の人事、定数管理との絡みで、学芸職に対して当局はどういうお考えをお持ちなのか。なぜ任期付きにしているのといったデータがここへ示されないと、ちょっと意見が言いにくいです。

前島正光委員： この資料だけで、適正な人数なのかどうなのかという議論は、私の感覚ではできないですね。それぞれの施設についても、具体的なイメージが固まっていない段階で、今までやってきた学芸員の方々の動きと、これからあるべき姿を考える時、違ったあり方があるのではないかという思いもあります。どうも今ここで議論できそうもありません。

渡辺一雄委員： リタイアした学校の教職員の計画的再雇用等についても、これを補うというような方法も含めて、行政内部の策とセットで議論しないと、これ何のことかわかりません。

前島正光委員： 将来的には、一般の市民をいかに活用するかがテーマではないかと私は思うのです。学芸員がやっておられる仕事の中の一部や、情報伝達などを、市民にある程度サポートしてもらうことができるのではないかと。全ての仕事を学芸員がやらなくてもいいんじゃないかと思えます。

鈴木良明委員長： 報告書の中で、もし人員の配置に触れるとすれば、博物館、美術館の運営の根幹になる、そういう人を確保しなさいという、総論的なことを押さえておけばいいのかなという気がするんですけど。

山口有次委員： 市民や学生などの参加を促進する、ボランティアを募る、といった点は重要です。

渡辺一雄委員： 中心になる基幹職員は絶対条件として確保した上で、ボランティア等の市の人材を活用するということならいいと思います。

濱田隆委員： 人事行政の問題はあるにしても、やっぱり人材の確保・育成が絶対に必要だということを文言として入れておく必要があると思います。特に歴史民俗、歴史関係で、古代、中世の担当者が一人もいないというのは、歴史を語れないわけです。欠けているよ、ということだけは言っておかないと。

鈴木良明委員長： 報告書に入れ込む情報、ご意見をかなりいただいたと思います。今日の議論を踏まえて、次回は骨子案に沿った母案の検討作業に入りたいと思います。長時間ありがとうございました。